

資経本『中務集』の一首と説話との接点

加藤裕子

一

第二類本『中務集』の中に次のような歌がある。

京極院の桜おもしろきを、夕暮にむすめの公達と
めで見るに、蛸のはひのぼりければ、こととめて、
「昔めでけん人にや」など

「花の色は昔ながらに見し人のかたちは異になりけるかな
その夜の夢に、白き衣のすすけたる着たる女の、「星
のたまひつることは、『さのみききこしやしるこそ』
とふることをこそいひけれ、あな心憂や。」

「天の川めづらしきこと多かりとよこそこのころさわぐと
いふなれ

本文は資経本により、読解の便を考えて適宜漢字をあて、濁点
句読点などを施している。

『中務集』の現存諸本は、先学により二類に大別されてい
る。第一類本は、西本願寺本系・歌仙家集本系・伝西行筆本の
三系統に分かれたれ、伝本も多い。これに対して第二類本は、書
陵部蔵（五一〇・一二）御所本二十六人集所収本と、その親本
と目される冷泉家時雨亭文庫蔵資経本『中務集』の二本が伝
わるのみである。二九八首からなる第二類本は、第一類本には

ない特有歌二〇五首を有している。

二〇五番歌は第二類本の特有歌であるが、二〇六番歌は第一
類本にもある歌である。

資経本・御所本の書写の形態を確認すると、「その夜の夢に
あな心憂や」を二〇六「天の川」の歌の詞書のように写してい
る。そのような書写の形態をふまえ『私家集大成』は「その
夜の夢に」を「天の川」の歌の詞書として翻刻している。し
かし、詞書として見ると「天の川」の歌の内容とは整合しない
ように思われる。「天の川」の歌は、第一類本では「月のさわぐ
心」（伝西行筆本）⁴という全く異なる詞書を有しており、この
方が歌の内容と整合する。そのことを考慮しても「その夜の夢
に」を詞書とすることには疑問が残る。後に述べるように、
「その夜の夢に」は、二〇五番歌の詞書「京極院の桜」か
ら一連のものと捉えることができ、二〇五番歌の左注と見たほ
うがよさそうである。つまり、二〇五番の「花の色は」の歌は、
詞書と左注を伴った歌語りのような形態になっているのである。
そしてその内容は、説話と接点をもっており、『中務集』の中
では異彩を放っている。難解なところはあるが、この歌と詞書
および左注について解釈を試みることを通して、この一連の歌
語りと説話との接点について私見を述べる。

二

改めて二〇五番歌の本文を示し、解釈を進めてゆく。

京極院の桜おもしろきを、夕暮にむすめの公達と
めで見るに、蛇のはひのぼりければ、ことさめて、

「昔めでけん人にや」など

花の色は昔ながらに見し人のかたちは異になりにけるかな

その夜の夢に、白き衣のすすけたる着たる女の、

「昼のたまひつることは『さのみききこしやしる
こそ』とあることをいひけれ、あな心憂や。」

「京極院」とは、東京極大路に面した邸第で、のちに藤原道
長の邸宅となる土御門邸の別称である。道長の所有となるまで
の経緯には諸説があり、二〇五番歌が詠まれた時点で、誰の
所有であったかさだかではない。この「京極院」の桜が美しく
咲いているのを夕暮れに娘の姫君と賞美して見ていたところ、
その桜の木に蛇が這いのぼっていたので興ざめし、「昔めでけ
ん人にや」と思う。つまり、この蛇は昔この桜を賞美した人では
ないかと思ひ、歌を詠む。歌の「かたちは異になりにけるか
な」は、昔この桜を見ていた人が蛇に姿を変えたことを言うの
であろう。歌に続く左注は、その夜に見た夢のことを語る。夢
に「白き衣のすすけたる着たる女」があらわれるが、この女は
昔桜を賞美して蛇に姿を変えた女なのである。女は「昼のた
まひつることは、『さのみききこしやしるこそ』と『ふるこそ』
を言ったという。『昼のたまひつるこそ』とは二〇五番歌をさ
すで見られ、『ふるこそ』とは古歌の意で、女のことばの中に引
かれた『さのみききこしやしるこそ』をさす。これは『古今集』
卷十九・雑体 俳諧歌・一〇五五の讃岐の歌「題しらず／ねぎ

花の色は昔のままで変わらず、昔花を見た人の姿はすつかり
かわってしまったことだ。

その夜の夢に、白い着物の古びて汚れているのを着
ている女が、「昼おっしやったことは『さのみききこ
しやしるこそ』ということですね」とそんな古歌を
言ったのだった。ああ、なんていとわしい。

三

前節で述べたように、『中務集』二〇五番歌は、詞書と左注を
伴って、桜の木に執着した女が蛇になり、その女が夢にあらわ
れて古歌を引きながら「花の色は」の歌を解説するという怪異
性を帯びた歌語りとなっていた。このように、何かに執着した
ことよって蛇に生まれ変わるという話は説話に多く見られる。
たとえば、『今昔物語集』（卷十三・四十二）には、

今昔 京ノ東二六波羅蜜寺ト云フ寺有リ。其寺二年來住ム
僧有ケリ。名ヲバ講仙ト云フ。（中略）月日ヲ経テ、靈人ニ
付テ云ク、「我ハ此レ、此寺ニ住シ定読師ノ講仙也。我レ年
來法花経ヲ説シテ常ニ聞シ依テ、時々道心ヲ發テ、極樂
ヲ願ヒテ、念仏怠タル事無カリシカバ、後世ハ憑シク思ヒ
シニ、墓無キ小事ニ依テ、我小蛇ノ身ヲ受タリ。其ノ故ハ、
我生レタリシ時、房ノ前ニ橘ノ木ヲ殖タリシヲ、年來ヲ経
ルニ随テ、漸ク生長シテ、枝滋リ葉榮エテ、花榮キ菓ヲ結
ブヲ、我レ朝夕ニ此ノ木ヲ殖立テ、二葉ノ当初ヨリ菓結

事をさのみききけむやしるこそはてはなげきの森となるらめ」
の第一句と第二句である。『古今集』一〇五五番歌は、参詣者
の願ひ事を聞いてきた社は、ついにはその嘆きが集まって嘆き
の森になってしまふと詠んだものである。「白き衣のすすけたる
着たる女」は、私が桜の木を想うあまりに嘆きの森となり、つ
いには蛇になってしまったということですね、と二〇五番歌に
ついて解説したのである。『あな心憂や』とあるように、二〇
五番歌の作者は、このような奇妙な夢を見ていとわしく思うの
である。

なお、二〇五番歌と初句から第二句まで完全に一致する歌が
『後撰集』にある。

元良のみこ兼茂朝臣のむすめにすみ侍りけるを、法皇
の召してかの院にさぶらひければ、えあふことも侍ら
ざりければ、あくる年の春、桜の枝にさしてかのざう
しにさしおかせ侍りける

もとよしのみこ

花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつろひにけれ

（卷三・春下・一〇二）

桜の色は昔と変わらないのに、ともに桜を見ていたあなたは心
変わりしてしまったという意である。

以上をふまえて、改めて二〇五番歌の通釈を試みる。

京極院の桜が美しく咲いているのを、夕暮れに娘の姫
君と賞美していると、蛇が這い上がっていたので、興
ざめして、「昔桜を賞美した人であるか」などと言っ
て

ブ時ニ至ルマデ、常ニ護リ此レヲ愛シキ。其ノ事重キ罪ニ
非ズト云ヘドモ、愛執ノ過ニ依テ、小蛇ノ身ヲ受テ、彼ノ
木ノ下ニ住ス。願クハ、我が為ニ法花経ヲ書写供養シテ、
此ノ苦ヲ拔テ善所ニ生ル、事ヲ令得メヨト。

寺ノ僧等此ノ事ヲ聞テ、先ツ彼ノ房ニ行テ、橘ノ木ノ下
ヲ見ルニ、三尺許ナル蛇、橘ノ木ノ根ヲ纏テ住セリ。此ヲ
見テ、「実也ケリ」ト思フニ、皆歎キ悲ム事無限シ。

（以下略）

というように、橘の木に執着したことよって蛇に生まれ変わ
った講仙という僧の話が見える。また、『今昔物語集』（卷十三
・四十二）には、

今昔 西ノ京ニ住ム人有ケリ。品不賤ヌ人也。一人ノ女子
有リ。（中略）女子花ニ目出 葉ヲ興スルヨリ外ノ事無シ。
其ノ中ニモ何ニ思エケルニカ有ケム、桜ノ花ノ霞ノ間ヨリ
綻ビテ見エ、青柳ノ糸ノ風ニ乱タルモ不整ラズ、秋ノ葉ノ
錦ノ裁チ重タル様ナルモ見所有リ、小萩方原ノ露ニ濡チ、
籬ノ菊ノ色々ニ移タルモ皆様々に可咲キヲ、只紅梅ニ心ヲ
染テ、此レヲ翫ビケリ。（中略）花散ル時ニ成ヌレバ、木ノ
下ニ落タル花ヲ拾ヒ集テ、塗タル物ノ蓋ニ入テ、程下過ル
マデ匂ヲ愛ス。（中略）

而ル間、此ノ女子何ニトモ無ク悩マシ氣ニテ、態トニハ
無ケレドモ、日頃煩ヒケリ。日員積リテ病ヒ重ク成ヌレバ、
父母此レヲ無限ク歎クト云ヘドモ、墓無クシテ失ニケリ。
父母無限ク泣キ悲テ惜ムト云ヘドモ、事限り有レバ、葬送

シテ後、人々別レニケリ。其ノ後、此ノ紅梅ノ木ノ下ヲ見ルニ付テモ、惜ミ悲ム事無限シ。

而ル間、此ノ木ノ下ニ小サキ蛇ノ一尺許ナル有り。「只有ル蛇ナメリ」ト人思フ程ニ、明ル年ノ春、此ノ木ノ下ニ去年ノ蛇出来ヌ。木ヲ纏テ不去シテ、花榮テ散ル時ニ、蛇口ヲ以テ花ヲ食ヒ集テ一所ニ置ケルヲ、父母見テ、「此ノ蛇ハ、早ウ昔ノ人ノ成リタルニコソ有ケレ。哀ニ悲シキ事力ナ」ト思ヘドモ、「姿替テ有ルガ疎キ事」ト歎キ悲テ、清範殿久ナド云フ止事無キ智者共ヲ請シテ、此ノ木ノ下ニシテ法花経ヲ講テ、八講ヲ行ヒケリ。(以下略)。

と、西の京の女が紅梅に執着したことによって蛇に生まれ変わったという話が見える。このように、何かに執着した人が蛇になるという話は他にも見え、蛇をめぐる説話の一つの型になっていたことがわかる。当該『中務集』二〇五番歌をめぐる歌語りも、このような型にあてはまると言えよう。

このような型の説話がいつごろから語られていたのかはさだかではないが、『三宝絵』¹⁰序に、

君不見ヤ、王舎城ノ長者ノ財ヲ貯ヘテ我家富リト樂シガ、身終リテ蛇ニ成テ、古家倉ヲ守シヲ。又不見ヤ、倉衛國ノ女人ノ鏡ヲ見ツ、我兒吉ト慢コリシガ、命尽テ虫ニ成テ本尸ノ頭ニ住シヲ。蛇ト成虫ト成ムト生ケル時ハ不念メド、家ヲ食リ形ヲ食カバ後身ニ即成ニキ。

と、生前の欲深さによって蛇に生まれ変わった長者の話が見える。『三寶絵』は、永観二年(九八四)の成立とされるので、中

務が生きた時代にこのような型の話が語られていた可能性もある。

また、蛇の話ではないが、『俊頼髓脳』¹¹には、次のような話が見える。

京極殿に、上東門院のおはしましける時、南面に、花の盛りなりけるに、ひがくしの間の程に、けだかく、かみさびたる声にて、こぼれて匂ふ花さくらかなと、詠めける声を、聞こし召して、いかなる人のあるぞとて、御覧じければ、いかにも、人のけしきもなかりければ、怖ぢおぼしめして、宇治殿に、急ぎ語り参らせ給ひたりければ、「そのくせに、常にながめ侍るぞ」と、申させ給ひける。されば、ものの霊など、めでたき歌と思ひそめて、常にながむらむは、まことに、よき歌なめり。(以下略)。

京極殿の桜の盛りに、上東門院彰子が「こぼれて匂ふ花さくらかな」という桜をめぐる歌を詠吟している声を聞く。その声の正体は何かの霊で、素晴らしい歌だと思つていつも詠吟していたのだという。京極殿の桜をめぐる怪異譚という点で当該の歌語りと結びつき、注意される。

このように、第二類本『中務集』二〇五番歌をめぐる歌語りは、蛇をめぐる説話、さらには京極殿の桜をめぐる怪異譚と接点を持つており、『中務集』の中では異彩を放っているといえよう。『中務集』に収められている以上、中務自身の体験を記したものであり、「花の色は」の歌は中務の詠と見るのが穏当なのである。しかし、話の内容が説話と接点をもっていること、詞

書、左注に「はひのぼりければ」「ふることをこそいひけれ」と「けり」が見られることを考えると、巷間で語られていた歌語りが混入した可能性も否定できないであろう。

¹ 池田亀鑑氏『西行筆中務集』複製解説(昭和十四年、尊経閣叢刊)、久曾昇昇氏『国宝西本願寺本三十六人集』(昭和十九年、越後屋書房)、島田良二氏『平安前期私家集の研究』(昭和四三年、桜楓社)、橋本不美男氏『御所本三十六人集解説』(昭和四六年、新典社)、杉谷寿郎氏『新編国歌大観』第七卷・私家集編III解題(平成元年、角川書店)、樋口芳麻呂氏『冷泉家時雨亭叢書六五資経本私家集一』解題(平成二〇年、朝日新聞社)、新藤協三氏『合本三十六人集』解題(平成一五年、三弥井書店)など。

² 藤原資経の書写にかかる平安・鎌倉時代の私家集二十八集の中の一つで、樋口芳麻呂氏『冷泉家時雨亭叢書六六資経本私家集二』解題(平成二三年、朝日新聞社)によると、鎌倉時代後期の書写と見られている。

³ 『私家集大成』CD・ROM版によった。CD・ROM版『中務集』第二類本の底本は、御所本を採用している。

⁴ 他の第一類本系の西本願寺本では「つきさはかくころ本」、歌仙家集本では「つきさはくころ」となっており、「天の川」の歌の内容と整合する。

⁵ 『王朝文学文化歴史大辞典』(平成二三年、笠間書店)によれば、右大臣源重信の邸宅であったものを姪の倫子が伝領し藤原道長所有となったとする説と、藤原朝忠から女穆子へ、その夫左大臣源雅信から女倫子へという経路をたどって道長所有となったとする説との二説がある。

⁶ 蛇は、『倭名類聚鈔』に「和名倍美二云久知奈波」と見え、「へみ」あるいは「くちなは」と呼ばれたことがわかる。

⁷ 詞書には、桜を見ていたのは夕暮れと出てくる。当時、日が暮れるまでは昼と認識されていたらしい。したがって、「昼のたまひつること」は、夕暮れに詠まれた「花の色は」の歌をさすとしてよいだろう。

⁸ 勅撰和歌集の本文は新編国歌大観CD・ROM版により、内容にかかわらない範囲で表記を改めた。

⁹ 本文は、『新編日本古典文学大系』(小学館)によった。

¹⁰ 本文は、『新日本古典文学大系』(岩波書店)によった。

¹¹ 本文は、『新編日本古典文学全集』(小学館)によった。